





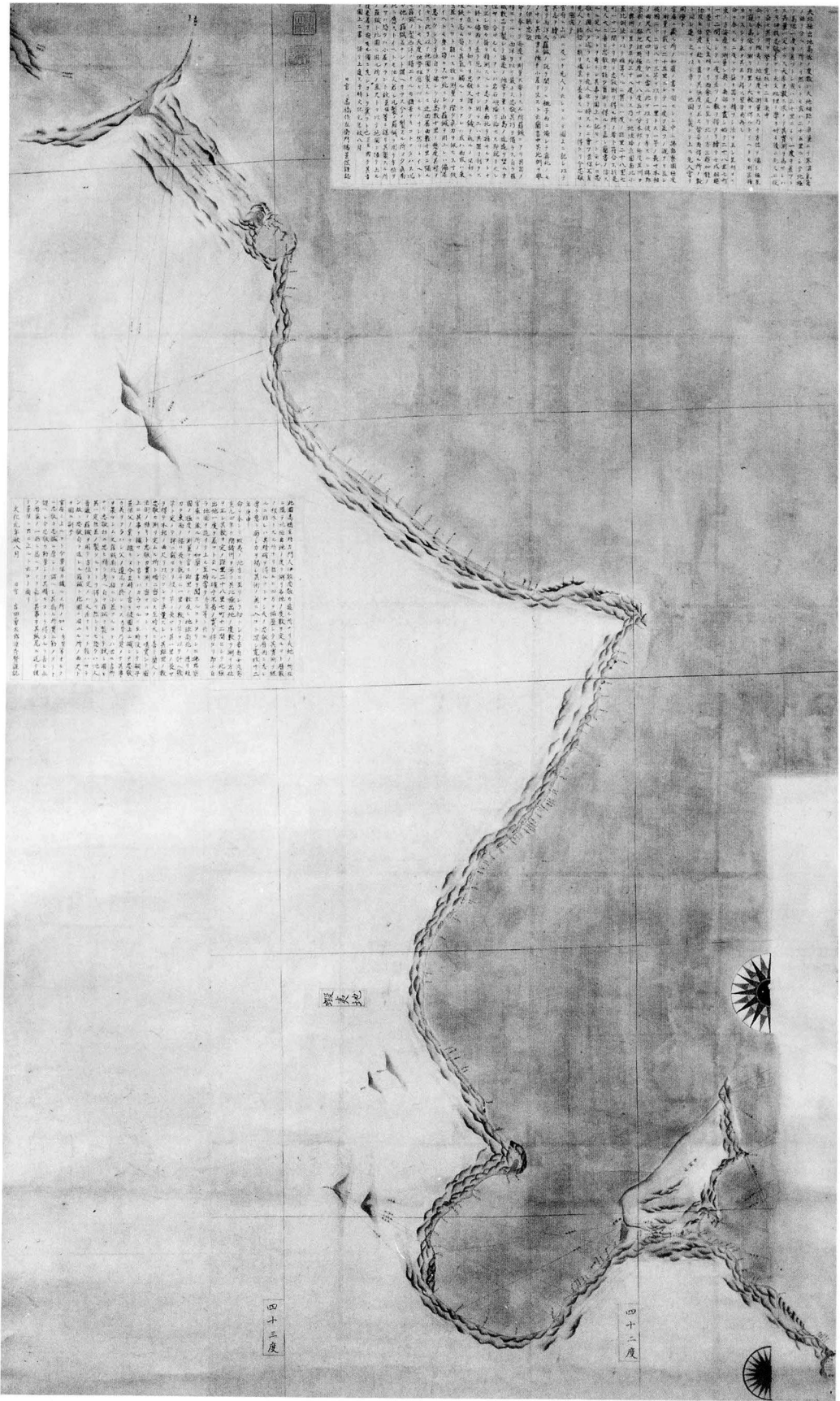


關東の部(四)部分図 鉛筆で不正確な方眼が書き込まれている。明治になって地図作製を伊能図から模写しようとした意図で記入したものである。



近畿の部(六)部分図 実に細かな字で書き込まれ絵的表現が美しい。





蝦夷地の部(一) 忠敬の測量はこの範囲で終っている。のち間宮林蔵の測量で補足完成している。不測量と5ヶ所書かれている。



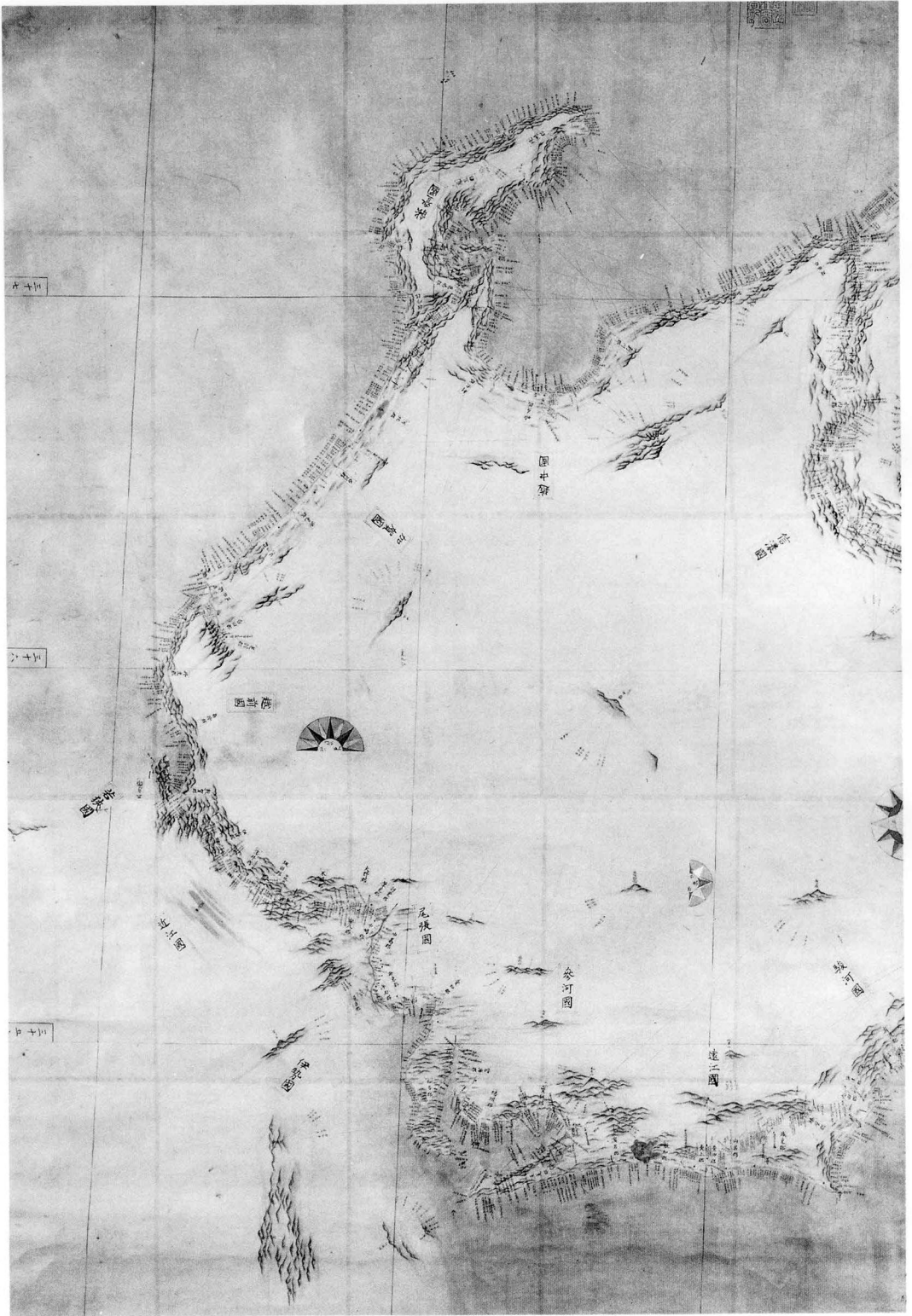
東北の部(二)





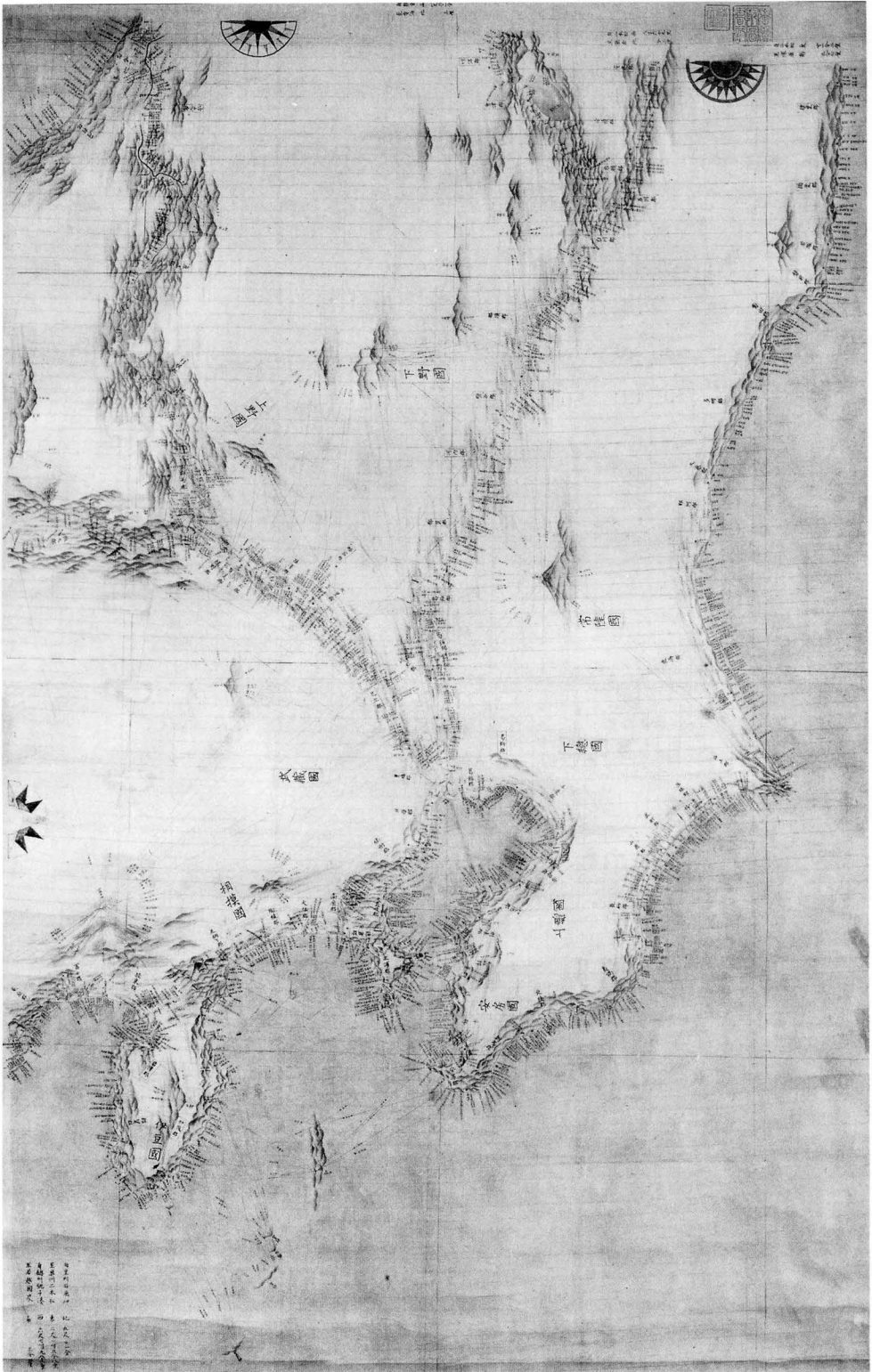
東北の部(三)





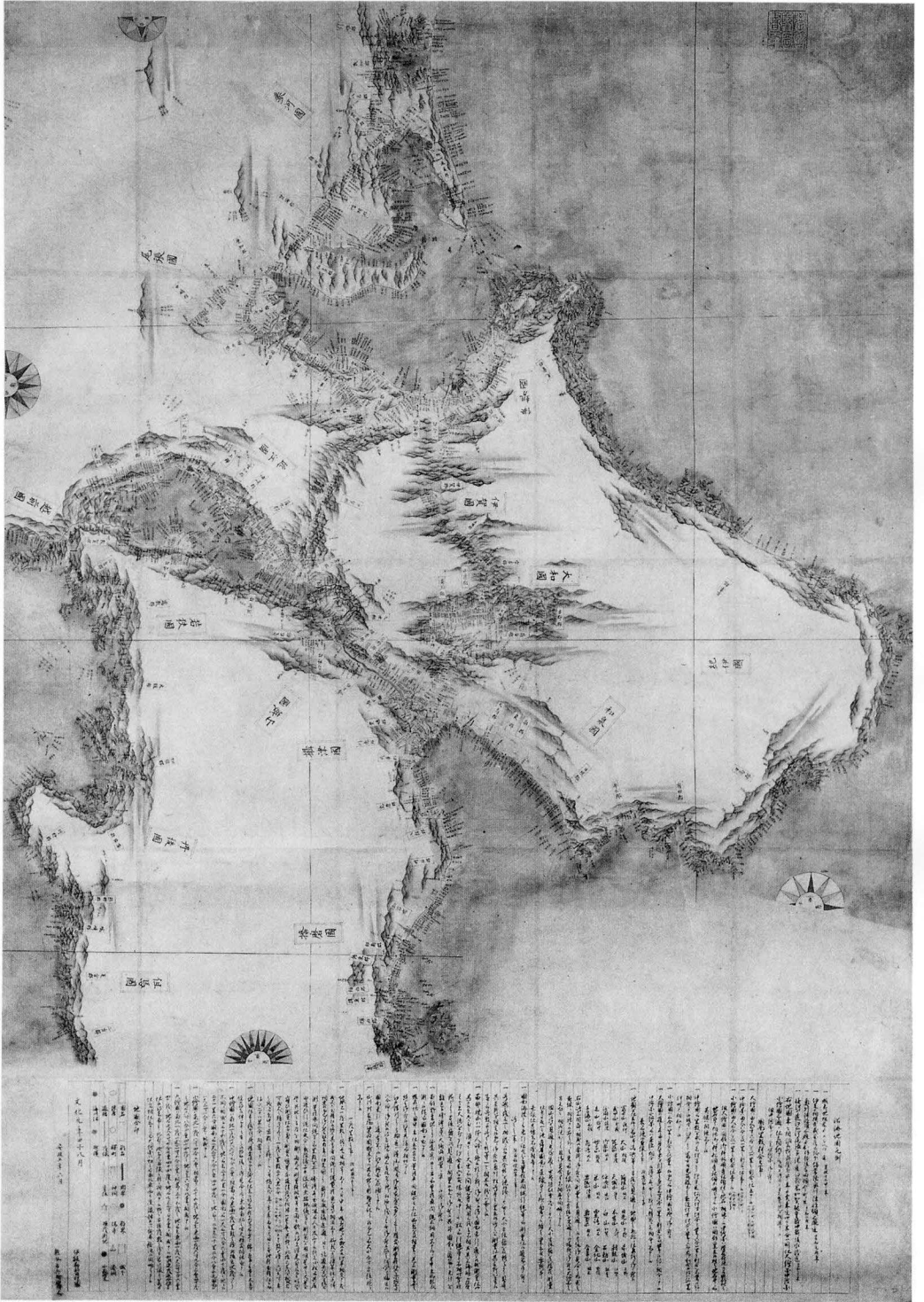
中部の部(五) 浜名湖周辺の描写は近畿の部(六)の方が詳細である。作製年代の差である。



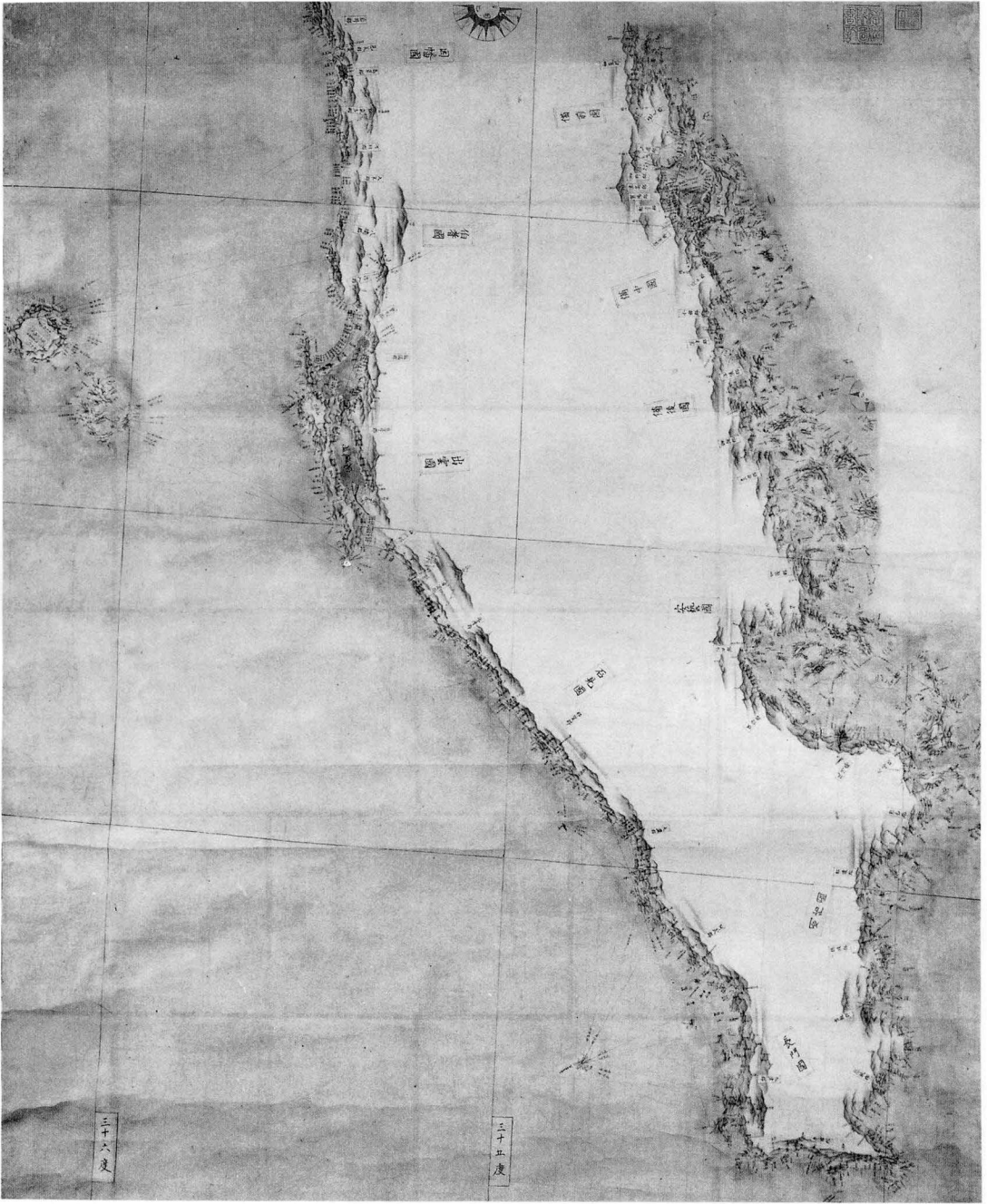


関東の部(四) 鉛筆で不正確な方眼が全体に記入されている。



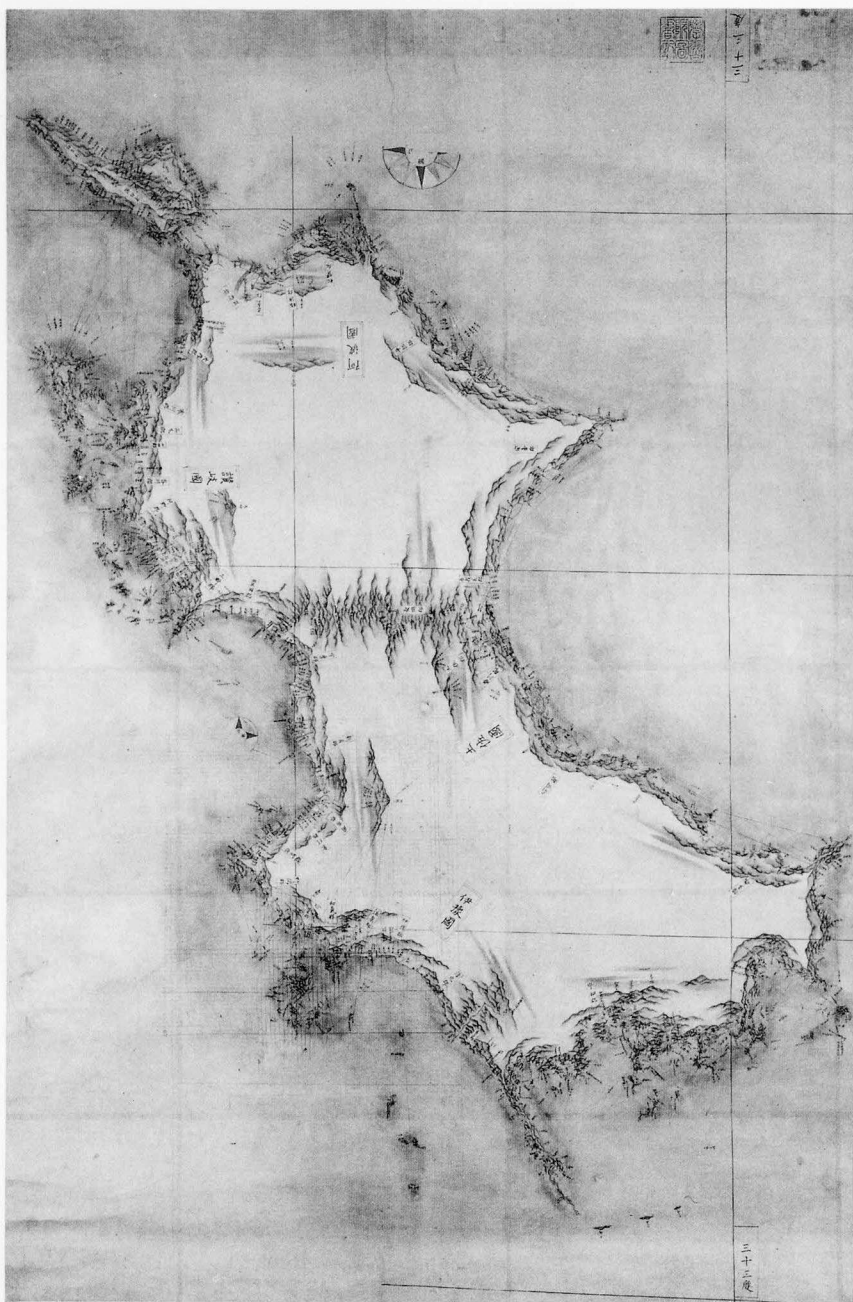


近畿の部(六)



中国の部(七) 内陸部分は空白があるが、第七次(文化6年)・第八次(文化8年)九州測量ののち補足されている。





四国の部 伊予北部には鉛筆の方眼がみられる。

# 「大日本沿海実測図」(伊能図)の中図について(2)

— 学習院大学図書館所蔵 —

齋 藤 仁

## はじめに

「学習院女子部論叢」第7号(1993年)で学習院蔵の伊能図中図について概要を紹介した。本稿は、平成9年、大学図書館、小倉芳彦大学長のご配慮で貴重な資料として全ての写真撮影、複製を終えたので、その内容を知る上で、8舗(学習院で軸装した8本)を写真で紹介するものとする。また、その後の研究、新しい発見などもあり、前文と重複する内容もあるが、伊能図の見方を含め概要を纏め直してみたものである。

伊能忠敬ブームについては生誕250年(平成7<1995>年)を記念して、色々なイベントが企画され、現在も続いている。忠敬は延享2(1745)年2月11日、千葉県九十九里町小関の小関家で生まれた。地元では平成8年、中象限儀(恒星の高度を測るもの)を前に天を仰ぐ忠敬の銅像(千葉大学上野弘道作)を建立した。郵政省の文化人切手シリーズで忠敬の肖像切手(80円)が発行された。さらに東京国立博物館蔵の「大日本沿海実測図」(中図)の複製、井上ひさしの「四千万歩の男」(講談社5巻)の小説、その他、「歴史街道」「歴史Eye」など雑誌類で特集が生まれ、彼の生き方、第二の人生を問う内容のものも多く出版された。

最大のもり上りは、平成10(1998)年、4月21日～6月21日の2か月間、江戸東京博物館で「伊能忠敬展」の開催であった。約11万人の入場者があり、シーボルト展と共に江戸東京博物館開館以来最高の入場者であった。学習院中図も展示され、その他、シーボルトが持ち出そうとした図(国立国会図書館蔵)など国内の貴重なものの大部分、さらに、気象庁から発見されたばかりの大図写本(43枚)の一部、開催中に発見された都立中央図書館の小図までも展示がされた。その他、グリニッチの国立海事博物館の三枚セット小図(幕末に日本近海を測量にきたイギリス測量艦隊に渡されたもの)、保存の良いことで知られ、わざわざフランスから運ばれてきた中図(イブ・ペイレ氏蔵)など世界的なものであり、簡単に見ることのできないものが、一堂に公開されたことに大きな意義があった。

もう一つのプロジェクトとして忠敬の歩いた道を各市町村の人々とリレーで2年間かけて足跡を訪ね歩くという興味あるもので、日本歩け歩け協会の発案で、現在の地形図(国土地理院発行)にそのルー



トを記入するお手伝いもした（伊能忠敬研究会）。当時の海岸線、街道を正確にたどることは無理なことであるが、近年、町おこしの一環として市町村史の作製と共に意義ある企画である。

学習院大学図書館に保管されている伊能図（中図）は、昭和46（1976）年、保柳睦美氏が「特殊中図」として紹介されたものである。学習院伊能図中図は8舗あり、昭和44年4月、元学習院女子部教授堀米次氏の寄贈によるものである。同氏は、これを昭和20年8月、終戦による陸地測量部の解散に際し、焼却寸前のものを友人、山北半次郎氏から貰い受け入手されたとのことである。児玉幸多先生（学習院大学名誉教授）のお話では、堀さんの近衛師団の基仲間で、たまたま訪れたときに古い書類など整理していて、庭に投げ出された物の中に伊能図があったとのことである。

学習院では早速、装丁を改め、裏打ち軸装し、桐の外箱を新調し保存の完全をはかってきた。

### 伊能図とは

伊能忠敬の測量隊が作製した日本図を一口に伊能図といわれる。伊能図には、大、中、小の三種類があり、大図（大絵図）は縮尺3万6千分の1、中図（中絵図）は縮尺21万6千分の1、小図（小絵図）が43万2千分の1である。しかし伊能隊が作った日本図を実際に見た人はごく少なく、見たとしても学校用地図帳に小さく載せられたものに限られているのではないだろうか。それだけに江戸東京博物館の「伊能忠敬展」で代表的な伊能図の展示、諸外国に現存する伊能図まで公開された事の意義は大きいと思う。

忠敬は文政元（1818）年73歳で死去、その後、久保木清淵はじめ天文方の下役、門弟たちの協力により「大日本沿海輿地全図」（大図214枚、中図8枚、小図3枚）および「大日本沿海実測録」（14巻）＜図1＞が完成し、高橋景保の序文をつけて、文政4（1821）年に幕府へ上呈している。

忠敬には日本地図のほか、その旅行中に事細かに記した全51冊にのぼる日記と、これを整理、清書した「測量日記」28冊が残されている。これらは寛政から文化にかけての諸国の地方文化を知ることができる貴重な資料でもある。この測量日記は国の重要文化財として忠敬の屋敷跡がある千葉県佐原市の「伊能忠敬記念館」（平成10年5月新しくオープンした）に保存されている。日記は寛政12（1800）年から文化13（1816）年までの諸国を巡っての「測量日記」と江戸滞在中の日記から成っている。この間10回にわたって、延3753日間、北は北海道から南は南西諸島に至るまでを測量した日々を一日も欠かさず記してある。歩いた距離は沿海約14,000km、島嶼・周辺約6,900km、街道約12,000kmと合計約33,800kmに達する。記述の内容は、毎日の天気のほか、測量隊が通過した街道、宿駅、支配、家数、人数、案内人、来訪者、本陣、脇本陣の名と家の造り、それに諸藩からの贈答品やその処分方法まで克明に記されている。また、街道筋の寺社や古城、名所などと、そこに保管されている書画・骨董の名なども記載されている。例えば、寛政12（1800）年4月19日、第一次測量のため江戸深川黒江町から蝦夷地へ出発する朝の記述は、二男（秀蔵14歳、第六次測量まで供をしたが、行いが悪いとの理由で父忠敬に勘当されている）など6人で出発したことが簡単に記されている＜図2＞。





## 伊能図の特徴

伊能測量の目的は、海岸線の形状と主要街道の経路を明確にすることにあつたので、測量線（以下測線という）は沿海と街道に限られ、内陸部分には空白域が残っている。四国・九州などの遠隔地の測量の帰路を利用して内陸部の測線の補足がおこなわれたが、かなりの空白域が残った。特に補足測量の機会がなかった関東の北東部・奥州に多い。

伊能図は手書き地図である。測線を朱線で描き、両側に彩色した沿道風景を加えている。また、測量結果の確認のために交会法の目標とした著名な山岳・島嶼・岬などの位置と遠景も書き込んだ。正確な縮尺の測線に加え、全体は絵画的に美しく仕上げられた。伊能図の描図形式は、製作時期、仕上げの精粗により差がある。

注 交会法とは、位置の確定している目標を見通して、方位を測定し、これまでの測量結果を確認するものである。

大図では、測線に沿っている城下・町並み・村落・田畑・原野・山景などの沿道風景を絵画的に描き、地名、国名、国界、群名、群界、宿駅などを文字で書き込み、領主名、領界も記す。一口でいうと、測線以外は絵画的である。交会法で利用した遠隔地の目標も記すが、中図・小図のように目標を見通した朱の方位線は描かれない。経緯線はあるものと無いものがある。天測を実施した地点は記号で示す。

中図では、測線に沿って地名、国名、群名を記すが、国界、群界、宿駅、神祠・寺院、港、天測地点などを記号（地図合印という）で表示する。沿道の山景は概略を記し、経緯線を記入する。交会法で利用した遠隔地の目標には朱の方位線を描き、測定地からの方位を記入する。多数の方位線は中図の正確さと華麗さを強調するのに役立っている。

小図は、中図とほぼ同様で、内容が簡略化されている。構成要素として、地名、国名、群名を文字で、群界、国界、宿駅、神祠、寺院、港などを記号で表示するが、天測地点は省略している。経緯線・交会法の目標への方位線を記入する。

そのほかに、中図・小図では、凡例、付表などが記入されたものがある<図3>。

## 伊能図の製作

伊能図の製作にあたっては、野帳のちょうにより、測線にしたがって針穴を明けた測量下図をまず製作する。つぎに地図を描こうとする和紙の上に測量下図を重ね、針穴を針で突いて和紙に写す。できた針穴を朱線で結べば測線が完結する。そのあと、沿道風景を写生しておいた<sup>あらえす</sup>龐絵図を見て風景を加えた。

地図用紙を何枚か重ねておいて、同じ作業をすれば複数枚の針穴図をつくることことができる。当時の手書き地図で、針穴を使って製作した例はない。原図をつくり、これに複製する用紙をかぶせて敷き写すのが普通であった。伊能図だけが初めに下図を描き、針穴をつかって測線を写して地図を製作した。

大図は実測結果を下図に描いたのち、いったん縮小して寄せ図し、天測結果との照合など要所の調整をしてから下図の定稿とする。中図では大図の測量下図を集めて縮尺を小さくし、突き写し用の原稿図



をつくらなければならない。小図では、中図の原稿図を集めて縮尺を変えて小図の原稿図を作る。これらの原稿図（以下定稿図という）を突手本と呼んでいる。原稿図の描画および中図・小図への編集の途中で誤差を累積しないよう、紙の用意・下図の描き方などの製図上の細かい注意は、忠敬の弟子の渡邊愼が後年著した「伊能東河先生流量地伝習録」に詳しく述べている。

針穴を使う地図製作は、測線の信頼性の確保にあったようである。ただ、結果として複数枚重ねて針穴を写すことができたので、測線の精度の高い図を何枚か同時につくることが可能である。そのなかの一枚に入念に沿道風景とか図の構成要素を書き込み、凡例・付表などをつけて幕府への上呈本（以下正本という）、としたのであろう。また、一枚は、ほぼ正本に準じた形に仕上げ、控え図として伊能家に残された（以下副本という）と考えられる。

正本に準じて仕上げたという意味はつぎのとおりである。伊能家に残っていた副本は、昭和36（1961）年に殆どすべて佐原市の伊能忠敬記念館に寄付されているが、これらの諸図は正本と全く同じには、仕上げられてはいないと推測されるからである。例えば、文化元年提出の日本東半部沿海地図（以下沿海地図と省略する）は伊能諸図のなかでは有名な図であるが、伊能記念館蔵の中図には付表が描かれていないし、正式な題名も書いていない。

ところが、諸侯に献呈された沿海地図中図、例えば国立史料館蔵（津軽藩旧蔵）の図では、題名はないが、付表・凡例ともに描かれている。諸侯への献呈図が正本とどの程度ちがっているかはわからないが、記念館の副本とちがっていることは確かである。また、彩色にも多少相違がみられる。

つまり、手書きであるゆえに、仕上げの程度には、用途と提出先によって多少差がみられるということである。複数枚重ねて針穴を明けた地図紙を用いて、提出用（正本）、控え図用（副本）、諸侯への提供用等、用途に応じて、記入内容、彩色、付表、凡例、題名、識語などの、いわば完成度を若干変えて仕上げられたようである。

伊能忠敬のグループにより、定稿図を写して作成された伊能図には必ず針穴が残っている。逆に針穴があるものは、一部の例外はあるが、伊能グループの作成と考えてよい。

よって本稿においては、伊能図の性格上の区分をつぎのとおりとした。

- 正 本 = 幕府または天文方への提出本
- 副 本 = 伊能家控え図および針穴があって控え図と同等以上の完成度のもの
- 写 本 = 江戸期において手書きで複製されたもの
- 模写本 = 明治期以降手書きで複製されたもの
- 諸 本 = 下図、下書き、試作図など完成品ではないもの

写本・模写本であっても、原本が良く丁寧に筆写されれば、理論上原形に近い伊能図をつくることができる。そのような優秀な図も多数現存する。最近の調査では、伊能忠敬在世中に伊能図が貸し出され



た記録が見つかった。当時から写本は存在したと考えられる。前記分類は、来歴の大分類と考えてもよく、現存する伊能図の地図としての評価と直結するものではない。

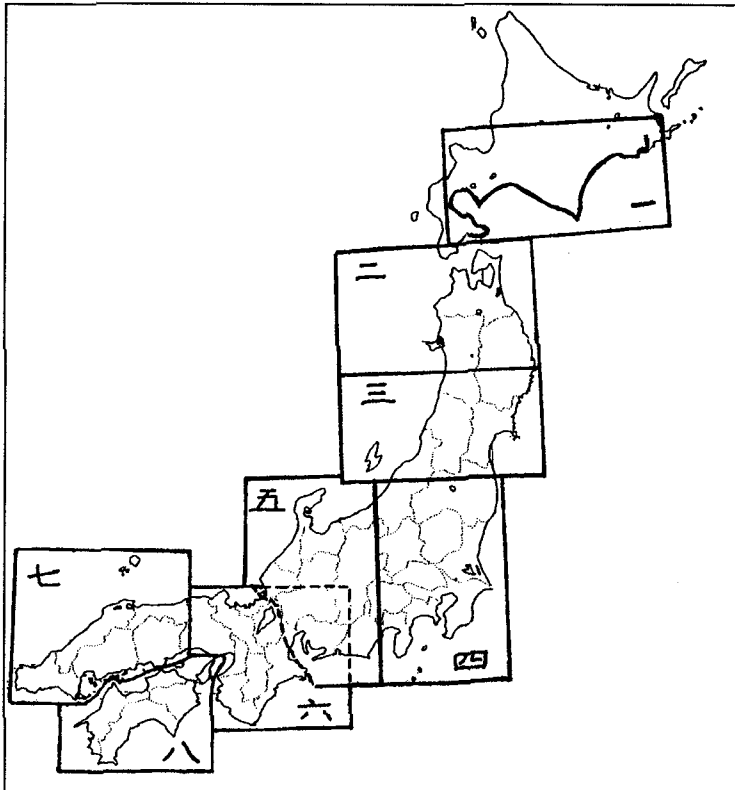
### 学習院伊能図中図の内容

〈縦の長さ×横の長さ cm〉

- 一 (北海道-東南部) 蝦夷地 〈119×198〉
- 二 (東北-北部) 陸奥・出羽 (北部) 〈107×184〉
- 三 (東北-南部) 陸奥・出羽 (南部)・越後・佐渡 〈100×184〉
- 四 (関東) 下野・上野・常陸・下総・武蔵・相模・伊豆 〈113×178〉
- 五 (中部) 能登・越中・信濃・加賀・越前・若狭・尾張・駿河・参河・遠江 〈123×181〉
- 六 (近畿) 参河・尾張・伊勢・近江・伊賀・大和・紀伊・若狭・和泉・山城・摂津・丹後・播磨・但馬 〈120×170〉
- 七 (中国) 因幡・伯耆・出雲・石見・備前・備後・備中・安芸・周防・長門 〈125×154〉
- 八 (四国) 阿波・讃岐・土佐・伊予 〈99×150〉

以上の8舗 (軸装されているので8本) で九州の部を欠いている。

〈図4〉  
学習院中図の構成



学習院中図の8本は同時代の作製内容でなく、幕府上呈の時期別に分けることができる。

文化元（1804）年提出の作成内容	5 舗（一、二、三、四、五）
文化4（1807）年提出の作成内容	2 舗（六、七）
文化6（1809）年提出の作成内容	1 舗（八）

の違うセットになっている。また沿海地図の中図の上呈図は、蝦夷地、奥州、関東・中部の3舗構成であるが、学習院中図は、奥州を北部と南部に二分し、関東と中部も二分して全5舗構成となっている。奥州の部は付表も含め単純に二分されているので、原図から写すとき、大きすぎる図を二分したともおもわれる。これに文化4年の図2舗と文化6年の1舗を加えて8舗となっている<図4>。

文化元年提出図は最終版（文政4年〈1821〉）以外の伊能図群のなかで最も注目に値する図である。またの名を日本東三十三国沿海地図ともいうが、長いので沿海地図と省略して呼んでいる。

寛政12（1800）年に蝦夷地測量を始めてから5年かかって、尾張・越後以东の海岸線の測量（沿海測量）を終わり、4回の測量の成果を一つの図にまとめて幕府に提出したものである。大図69枚、中図3枚、小図1枚からなっている。当地、地図は絵図と呼ばれたが、沿海地図では縮尺に従って海岸線と街道の測線を記し、その周囲に絵画的景観を美しく付記した。海岸線は現在の地図と殆ど同じである。

提出は文化元年8月であるが、9月6日に十一代将軍家斉が城中で閲覧したことが続徳川実記に書かれている（年月日は旧暦）。大図は一枚がほぼ畳一枚の大きさ、中図、小図は二畳から三畳の広さがある。大図を日本列島の形に広げて閲覧するには、約四百畳の広さが必要である。お城の大広間でもなければとても並べることはいかない。

将軍は老中・若年寄・勘定奉行などを従えて閲覧した。若年寄には伊能測量の担当の堀田撰津守、勘定奉行の中川飛驒守がいた。この閲覧により伊能忠敬は低い身分だが幕臣（御家人）に取り立てられ、以後の測量は幕府の直接の事業となった。同心の下役が配属され、門弟を含めて多額の旅費手当が支給されるとともに、道中で利用できる無賃の人馬の数が増加された。さらに、支援を確実にするため、諸藩には老中戸田采女正から勘定奉行経由で通達が出されている。西国の測量では忠敬が幕臣として槍を立てて測量に従事している姿の資料、記録がある。

忠敬の測量は、沿海地図以前と以後は幕府の姿勢がはっきり違うので区別して考えなければならない。沿海地図以前の4回の測量は、御用の旗を立て、測量命令を受けてはいるが、実態は伊能忠敬の個人事業に幕府が補助金を出したものである。引き連れた隊員も内弟子と従者のみであった。将軍閲覧後は、立て続けに、幕臣に登用、西国を測量せよ、下役を配属すると命令が出されている。

沿海地図の成功は、当時かなり話題になって諸侯からの入手希望も多かったようである。伊能諸図のなかで沿海地図も多く現存している。伊能グループで製作したもの以外に写しもつくられ、写本も含めると、次のようなものが現存している。

津軽家伝来の沿海中図・小図（国立資料館）、伊達家伝来の中図（宮城県図書館）、古河の鷹見泉石の小図（古河歴史博物館）、尾張家陪臣大導寺家の小図（逢左文庫）、徳島藩の中図（徳島大学図書館）、堀田家・中川家の小図（国立国会図書館）、そして来歴不詳の学習院の沿海地図中図である。また最近イタリアでカナ書きの中図が発見され注目された。まだまだ知られていない沿海地図はありそうである。

学習院中図は針穴はなく写本である。保柳陸美氏は“伊能忠敬の科学的実績”の中で、伊能グループによる試作的な意味を含め「特殊中図」と名付けたが、この分類は必ずしも適当ではない。

中図でありながら、大図にのみ書かれている幕府領、大名領、寺社領などの領主名が記入されており、そのこと自体が特殊であることは間違いない。しかし、前述したように地図そのものは、文化元年の沿海地図の中図、文化4年の中図（畿内・中国）ならびに文化6年の中図（四国）の集合である。なぜ、このような寄せ集めのセットがあるのだろうか。忠敬は測量のつど新たに測った地域の地図を作成したが、それまでに作られた地図には手を入れなかった。したがって、四国測量終了後の時点で、中国を所望した諸侯があったとしても、学習院中図のようなセットの組み合わせしかないのである。しかし時代の異なる地図の接合部には内容に差が出てくる。文化元年の中部の部（五）と文化4年の近畿の部（六）と一部重複している。接合記号のコンパスローズが内陸部に置かれ、尾張（名古屋）付近から知多・渥美半島が重複して描かれて居る。とくに浜名湖の描写の詳細に差がはっきり出ている。また文化4年図（畿内）の平野部にはピンク系の彩色が美しく絵画的配慮がされている。

**蝦夷地の部（一）** 第一次測量（寛政12年）4月19日、55才の忠敬、内弟子3人と下僕2人を連れて江戸を出発、千住宿より奥州街道を進み、白河、仙台、盛岡、青森を経て、5月10日、津軽半島の三厩に到着。ここで9日間風待ちをしたのち出航、蝦夷地の吉岡に上陸している。箱館の蝦夷会所に寄って手続きを済ませ、室蘭、襟裳岬、釧路と東海岸を測量し、根室の少し西側の西別まで行って帰路に就いている。往路と同じ道を測量しながら帰り、10月21日に江戸に到着している。測量日数は180日であった。大変苦労した最初の測量であり、幕府もまだ“測量試み”扱いで勘定方から「便宜をはからうように」との触書が発行される程度である。幕府の公式事業扱いは第五次測量からである。忠敬の蝦夷地の測量の範囲は学習院中図の（一）であり、“不測量”の記入が5か所にあり、測量の厳しさを物語っている。のちに忠敬隊の未測量地は間宮林蔵によって補われている。第八次測量のため九州へ旅立った忠敬の一行を見送った林蔵は、文化8（1811）年12月30日、幕府から蝦夷地勤務を命じられ直ちに江戸を出立した。蝦夷地について林蔵は、文化10年から12年にかけて、忠敬の未測量地であった蝦夷の南海岸以外の沿岸を測量し、その結果を江戸の忠敬宅に届けている。忠敬の日記にもその記録がある。欄外には高橋景保の「日本東半部沿海地図序文」（文化元年上呈の小図に記載）が載せてある。



**近畿の部（六）** 平野部のピンク色と山や雲のたなびきなど狩野派の絵を思わせるような美しい表現をしようと試みている。琵琶湖付近所領が分かるような細かな字は見事である。沿海地図の凡例、伊能勘解由謹図の識語をそのまま写した別紙が貼り付けてあり、末尾に安政5年6月、熊谷市兵衛写とある。

**中国の部（七）** 九州測量以前のため中国地方の内陸部は空白であり、ややさびしい図となっている。第七次（文化8）、第八次（文化12）の九州測量の帰路に主要街道は手分けして測量している。瀬戸内海側の島嶼の間隙をぬって境界を設けたので **四国の部（八）** との接合記号のコンパスローズは貧弱ではあるが描かれている。

## 図の比較

学習院中図の最大の特徴は、前述したように中図でありながら大図（大絵図）の記載内容が記されていることである<図5>。測線に沿う町村名はもちろんのこと、幕府名、大名領知行所、社寺領など実にこまかな細字で記入されている。右図の大和地方の部分を東大総合研究博物館の中図<図6>と比較してみると学習院中図には見事な細字（保柳氏によると書の専門家は江戸後期の書法と推定している）で記入されている。技術的にも時間的にもこんな細かな記入事項を模写する必要性は何んであったのか、例えば全国の所領を総覧してみたいため、大図では大き過ぎるものを編集してみたのであろうか。大きな文字の国名、細密なはずの方位線、コンパスローズなどに粗雑な描き方の個所があるのもその目的は違っていたのであろうか。いずれにしても、中図上に表現する内容は、大図から写すか、所領の一覧表がなければできないことである。作業できる者は限られていたであろう。

領主名が記入され、まったく同じ組み合わせ<図4>の中図が、宮城県図書館の伊達文庫（一部欠本あり）<図7>に仙台藩旧蔵品として伝えられている。また平成8年に発見されたイタリア図（ローマのイタリア地理学協会蔵）<図8>は、まったく同じ構成で国名・群名・地名を片カナ書きとする中図八舗がある。これはイタリアの初代中日総領事であったクリストフォロ・ロベッキー氏が収集した日本関係資料の一部であった。

仙台藩の旧蔵図は写本で、橙色系が強く彩色は派手であるが、描図は学習院中図のほうが丁寧である。イタリアの中図も写本であり、彩色は簡単であって、描画もあまり丁寧ではない。国名-群名など地名位置をそのまま片カナ書きに置き換えてるのは、明らかに、学習院中図を写したか、両方が同じ原因から写したのと考えると興味深いことである。

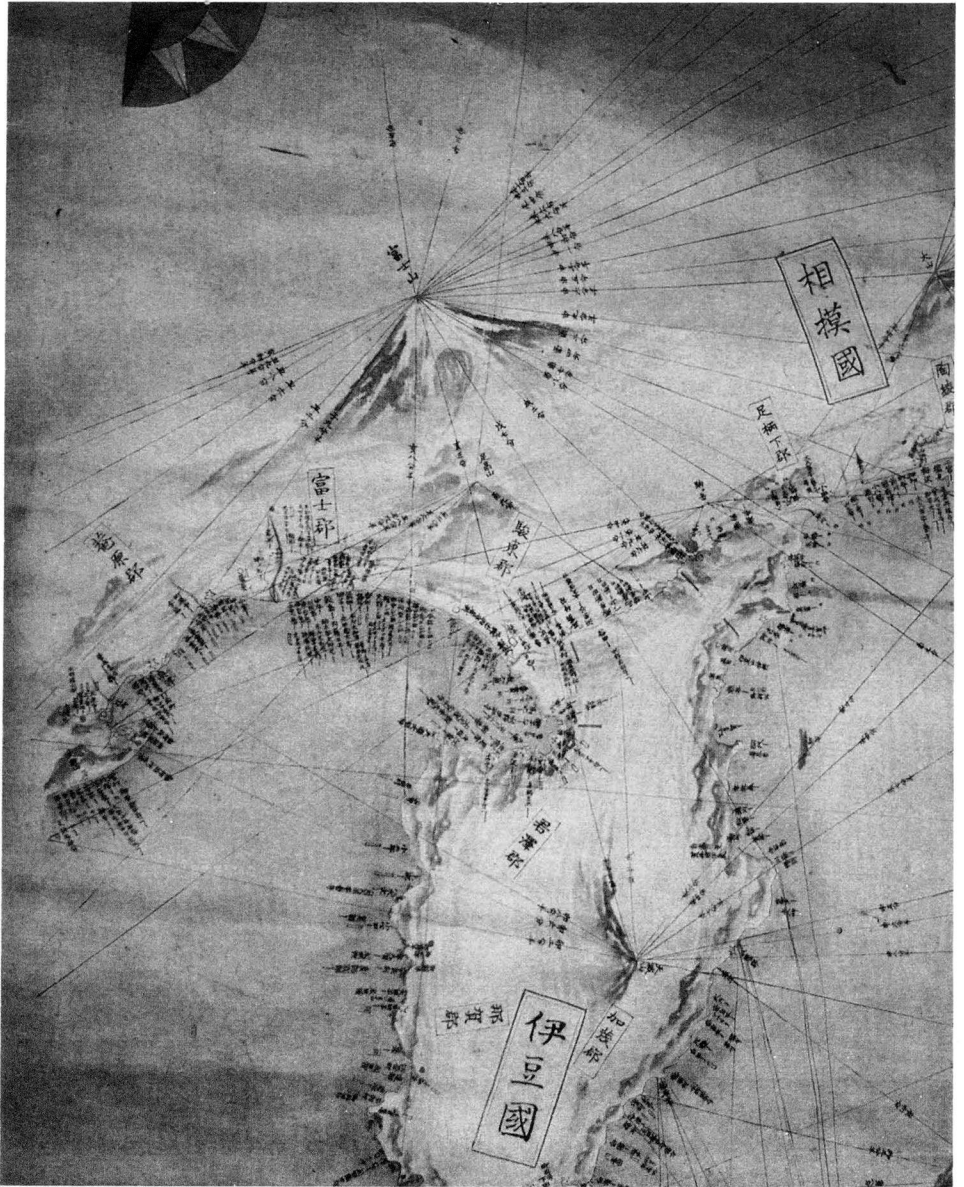


図5 学習院大学蔵の伊能図中図<下図>と同一地域であるが内容は豊富で、大図に書くべきもの、幕府領・大名名・寺社領などが細字でこまかに書き入れてある。



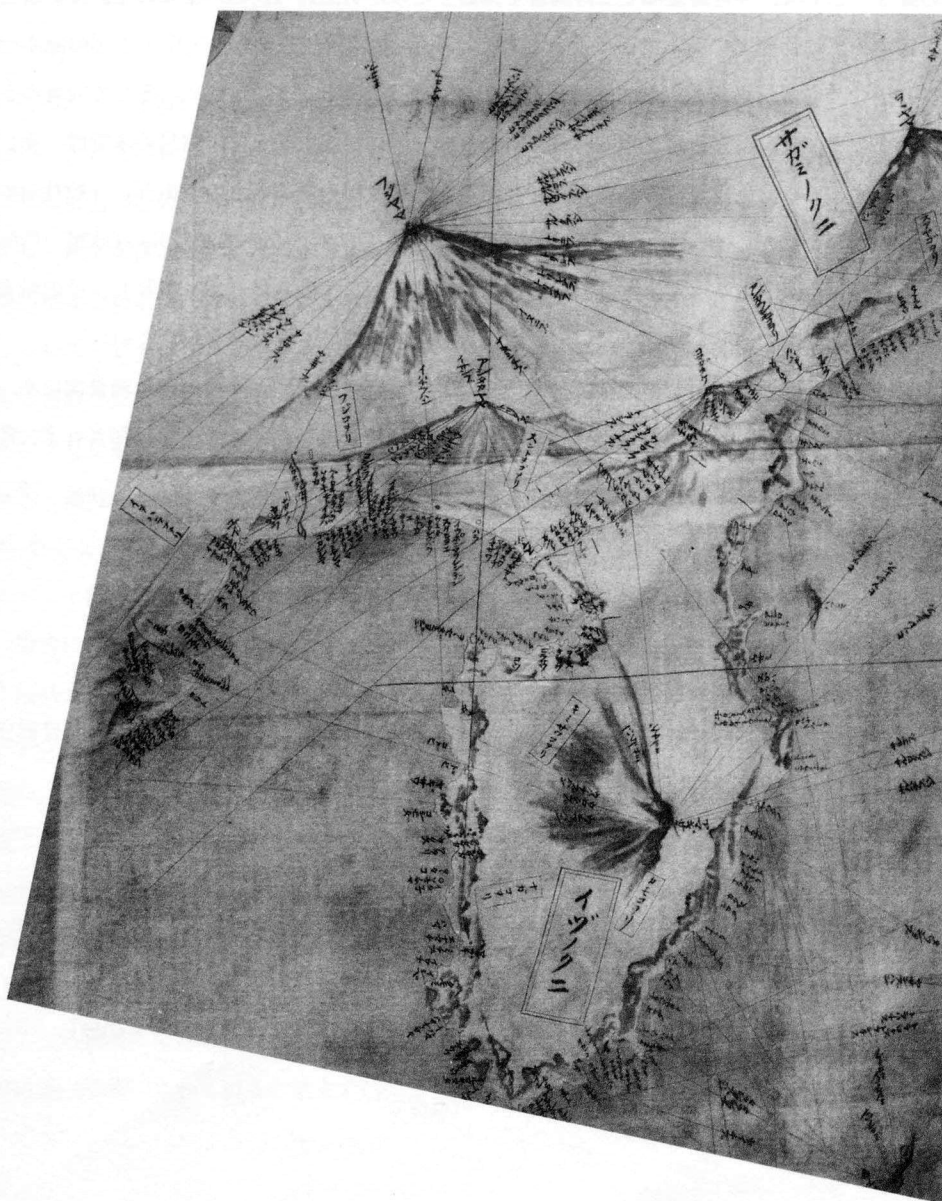
図6 文政4年上呈の伊能図中図（東大総合研究所資料館蔵）上図と同じ奈良盆地付近の記載内容はもっと簡潔で他機関の中図もこれとほとんど同じである。

<図7>宮城県図書館（伊達文庫）の伊能中図





<図8>イタリア（ローマ）で発見されたカナ書き伊能中図  
(イタリア地理学協会所蔵)



## おわりに

学習院中図8舗には全て「陸軍文庫」の蔵書印があり、一部に消そうとした跡が残っているものもある。陸軍文庫へどのような経路で入ったか分からないが、陸地測量部にあったのは確かである。先述したように、堀教授が陸地測量部の解散とともに友人（同郷）から譲り受けたことになっている。関東の部（三）には、鉛筆で精密ではないが方眼線が記されていて、一番使用したのであろうかすれた汚れが目立っている。他にも中国の部（七）の一部と四国の部（八）は、伊予北部の松山・今治・石鎚山にかけてかなり細かな方眼が集中的に記されている。これも決して精密でないが、明治以後の模写の方法で、この伊能中図より模写しようと試みた証拠である。

当時の動きとしては、陸地測量部で三角測量を開始したのが明治16（1883）年であり、それまで当面の必要に応ずるには伊能図に頼るほかはないと考え、明治5年に伊能家から大・中・小図の副本その他資料を借り出している（当時の工部省測量司の名で借用証明が提出されている）。そして内容の不足部分は天保図などで補い、模写をはじめている。明治11～12年に伊能中図と同一縮尺の軍管図、第1～6軍管区ごとに編集している。しかしこれはもともと陸軍の応急使用のためのものであり、一般社会の利用に供するものでなかったため、明治17年から軍管図よりもさらに精密な輯製20万分の1地図一色刷りの作製にかかっている。一方、海軍水路部でも伊能図を内務省地理局から借り出し模写し、その精密な海岸線に基づいて、海図の作製をはじめている。本図も写図の候補であったかも知れない。

以上のような伊能図の利用と貸借関係はよく分らないが、学習院中図が戦前の陸地測量部にあったこととおそらく、どこかの大家にあってのものが、明治年間に貸し出され、そのまま返却されずに置かれ、終戦直後の混乱により焼却されようとしたものであろう。

## 文 献

- 保柳睦美（1974）：伊能忠敬の科学的業績（古今書院）
- 齋藤 仁（1988）：伊能図について - 学習院蔵伊能中図 -（地理の友：東京都私立地理教育研究会）
- ◇（1993）：大日本沿海実測図（伊能図）について（学習院女子部論叢）
  - ◇（1994）：「伊能図のたどった運命」（歴史読本）
  - ◇（1994）：私は学習院大学図書館に眠っている「伊能忠敬図」です（学習院広報）
  - ◇（1997）：謎を秘めた学習院伊能忠敬測量の日本図-イタリアで発見された図-（学習院広報）
- 渡辺一郎（1997）：学習院大学図書館蔵伊能中図について（月刊古地図研究301号）
- 齋藤 仁 編著：忠敬と伊能図（東京都江戸東京博物館 図録、アワ・プランニング出版）（1998）
- ◇ 編著：伊能図に学ぶ（東京地学協会、朝倉書店）（1998）